冷泉家時雨亭文庫蔵『古来風躰抄』における和語表記の漢字

――藤原定家自筆平仮名文との比較――

村田　正英

目　次

一、本稿の目的と方法
二、資料
三、和語表記の漢字一覧表
四、『古来風躰抄』と定家筆三資料との漢字字種についての比較検討
五、異字同訓・同字異訓例についての検討
六、まとめ

一、本稿の目的と方法

筆者は、かつて藤原定家自筆の平仮名文三種、すなわち『近代秀歌』『更級日記』『土左日記』の中の和語表記の漢字について、

一、その漢字と和訓との間にはほぼ一対一の関係があること

二、同一漢字に対する和訓について、三本の間で違いは見られないこと

三、院政期の絵巻、仮名消息との比較で、定家自筆平仮名文と共通する漢字については、やはり漢字と和訓との対応

にほとんど違いは見られなかったこと

を指摘し、藤原定家の平仮名文にあっては、そこに出現する和語表記の漢字と、それが担う和訓とは一対一の統一された関係にあったこと、また、それが必ずしも定家個人にとどまる事象ではないことを示唆した。(1)

院政～鎌倉期の平仮名文における漢字の拡がり、並びにそれらの漢字と和訓との結び付きについて、その全体像を明らかにするためには、例えば定家のような一個人の使用漢字についての広範な調査・検討と併せて、他者のそれについての調査・検討も行われなければならない。このたびの調査は、そのような考えに基づき、定家の父、藤原俊成の自筆平仮名文である『古来風躰抄』（冷泉家時雨亭文庫蔵）を取り挙げ、和語の表記に用いられている漢字について、その漢字と和訓との対応関係を定家自筆の文献と比較し、その共通点あるいは相違点を明らかにすることによって、定家の平仮名文における和語表記の漢字の普遍性を検証しようとしたものである。

俊成の定家に対する教育が、どの程度のものであったか、それを詳細に記述した資料は多くはないようであるが、『拾遺愚草員外堀川院題百首』の序には、寿永元年（西暦一一八二年。以下同）二十一歳の定家が詠んだ「堀川院題百首」の出来栄えに父母が涙を流して喜んだことが記されており、俊成の定家にかける期待が相当大きかったことが知られる。(2)また、嘉禄二年（一二二六）に成った定家『僻案抄』の跋文にも「往年治承之比、古今後撰両集、受庭訓之口伝」とあり、俊成が実際にそうした教育を二十歳前後の若い定家に施したことが知られる。

『明月記』の治承五年（一一八一）九月二十七日の記事(3)を見ると、

廿七日　天晴。入道殿、如例引率、令参萱御所斎院給。（以下略、傍線は筆者が加えたもの）

とあり、俊成がいつも定家を連れ歩いていた様子が窺える。

また、同年十一月十日に初めて後白河院に伺候した俊成は、「いつも来るように」との院の言葉を得て、四日後には息子定家を伴って院に伺候し、定家を後白河院に引き合わせている。

十日　天晴。今暁、入道殿初令参院給。龍顔咫尺数刻云々。常可参由有仰事云々。

十四日　天晴。御共参院。令参御前給。

（『明月記』治承五年十一月）

これらから俊成の定家の教育に対する力の入れようが窺えよう。

一方、定家の方でも、一家を成した後も度々俊成のもとを訪れており、時には助言を得ることもあった。

廿三日　天晴。右中弁奉書曰、「百首明日可進」。率爾周章、未時許参入道殿、愚詠二十首許不足、所詠出経御覧。仰云、「皆無其難。早案出可進也」者。又、見御歌、申所存退帰。

（『明月記』正治二年（一二〇〇）八月）

こうしたことは、必ずしも定家の漢字用法についての俊成の影響を証拠だてるものではないが、歌学全般にわたって、定家が俊成の強い影響下にあったことは間違いのないことと考えられる。

本稿は、和語表記の漢字とそれが担っていた和訓との対応関係について、父子の間でどのような共通点・相違点が見出せるかを検証し、定家における漢字と和訓との関係の普遍性について考えてみようとしたものである。

二、資　料

右で述べた目的に従い、藤原俊成と藤原定家の自筆仮名資料として、次の四資料をとりあげた。それぞれ和歌を表記した部分に限ったのは、音数の上から、その漢字の担っている訓の特定が比較的容易であることと、二資料に重出している歌の場合、双方を照らし合わせることで訓みを確認することが可能であることによる。

①藤原俊成自筆　冷泉家時雨亭文庫蔵『古来風躰抄』　※和歌の部分のみ。ただし『万葉集』の原文の引用部分は除く。計六〇五首。

②藤原定家自筆　旧酒井家蔵本『近代秀歌』　※七丁裏以下の和歌のみ。計六八首。

③藤原定家自筆　伊達家旧蔵本『古今和歌集』　※「春部」以降の和歌部分のみ。計一一一一首。

④藤原定家自筆　大橋家蔵本『奥入』　※和歌の引用部分のみ。催馬楽などの万葉仮名表記の歌謡は除く。計三六〇首。

資料①の『古来風躰抄』は、藤原俊成が、式子内親王とおぼしき人物から、和歌とはどのようなものか、どうあるべきものか等について文章にしたものを奉れと命ぜられて差し出した歌論書であり、いわゆる「初撰本」で、建久八年（一一九七）、俊成八十四歳の時の書写と考えられる。[4] 本文は朝日新聞社『冷泉家時雨亭叢書』中の一本に拠った。所載の和歌は、ほとんどが上句の五・七・五と下句の七・七とに分けて二行に記されている。

資料②の『近代秀歌』は、藤原定家が、承元三年（一二〇九）源実朝の和歌の指導のために書き送った歌論書の手控えとして残したものに、後年手を加えたものとされる。ただし、書写年代については明らかではなく、承元三年（定家四十八歳）以降とするほかはない。[5] 本文は、武蔵野書院の影印本に拠った。所載の和歌はすべて上の三句と下の二句とに分けて二行に記されている。

資料③の『古今和歌集』は、それ自体の奥書に書写時期の記載はないが、数ある定家書写の古今和歌集の奥書と比較することで、およそ定家六十五歳の嘉禄二年（一二二六）から翌年にかけて書写されたものと考えられている。[6] 本文は汲古書院の『藤原定家筆古今和歌集』の影印に拠った。なお、所載の和歌は一首一行が原則となっている。

資料④の『奥入』は、最初『源氏物語』の各巻末に書き加えておいた注記を、のちに切り取って注記のみの冊子にまとめたものである。従って、これも書写時期は明確ではないが、建久の頃（一一九〇～一一九九）に盗まれて以来、約三十年間所持していなかった『源氏物語』を、嘉禄元年（一二二五）二月十六日、やっと写し終えたという記事が『明月記』にあり、切り取ったのがこの『源氏物語』だとすれば、書写時期は定家六十三歳の元仁元年（一二二四）より翌嘉禄元年ということになる。ただし、切り取った時点で手が加わったことも考え得るので、その場合は、『奥入』奥書に「桑門明静」とあることから、定家出家の天福元年（七十二歳）以後としなければならない。[7] 本文は、日本古典文学会『奥入』の影印に拠った。

なお、この『奥入』は、ところどころ墨による塗抹や天地への書き込みがあり、また和歌の一部のみを示して筆を留めたりした箇所もあるので、定家が人々の前に公に示そうとして清書したものではないと考えられる。それだけに、定家の普段の漢字用法に最も近いものが表れていると考える。所載の和歌は多くが上の句と下の句と分けて二行に記されているが、紙面の余白や行間に書き込まれた歌の中には一行に記されたものも少なくない。

三、和語表記の漢字一覧表

前掲の四資料について、その和歌の中に用いられている漢字を可能な限り単字に分割し、その和訓にしたがって五十音順に配列し、あわせて用例数を示したものが「漢字用例一覧表」〈表1〉である。各資料の欄に掲げた漢数字は、その漢字表記例の用例数を示す。ただし、和語表記の漢字に限定したため、例えば『古今和歌集』の「菊（きく）」は除いてある。その他に、この一覧表を作成するにあたって次のような処理を行った。

1　単字での比較を目指したので、例えば「秋風」「入江」などは、「秋」「風」、あるいは「入（いり）」「江」に分割し、それぞれ「和訓」の項目として取り上げた。ただし、「漢字表記例」ではそのまま単語の形で掲げておいた。

2　見出しの「和訓」は、分割した個々の漢字の和訓の性質によって、〔名詞〕〔動詞〕〔形容詞・形容動詞〕〔副詞・連体詞・接続詞〕〔助詞・助動詞・連語〕の五つに分類し、それぞれの中で五十音順に配列した。このうち、動詞の見出しは連用形をもって代表させた。

以上のような方式によった結果、たとえば「露けし」「うら山しく」はそれぞれ〔名詞〕の「露」「山」の項に掲げ、名詞の「戀（こひ）」、副詞の「返ゝ（かへすがへす）」はそれぞれ動詞の「戀（こひ）」「返（かへし）」の項に掲げることとなった。

3　漢字二字または三字に対するいわゆる熟字訓および枕詞は、それのみで一つの項目を立てた。それらは「和訓」に

傍線を附して示した。

例、「天河（あまのかは）」「今日（けふ）」「郭公（ほととぎす）」「葦引（あしひき）」「空蟬（うつせみ）」ほか。

4　〔助詞・助動詞・連語〕に挙げた「釼（けむ）」「蝶（てふ）」「南（なむ）」「覧（らむ）」の読みは和訓とは言えないが、和語を表したものとして他の漢字と同列に扱った。

5　地名（「春日（かすが）」「住吉（すみのえ）」など）・人名については、今回の考察の対象からは除いた。

6　ただし地名の中でも「春日野」「龍田河」などのように固有名詞部分（「春日」「龍田」）と普通名詞部分（「野」「河」）とに分割可能なものは「野」「河」の部分に限って、それぞれ「の」「かは」の項に「春日野」「龍田河」の形で採り上げた。

7　同じく、地名であっても、「いその神（石上）」「時はの山（常盤の山）」「宮きの（宮城野）」「山しろ（山城）」のように、地名の一部のみが漢字で表記されているものについては、その漢字の部分を採り上げた。

8　『古今和歌集』において「イ」（異本）の注記を有するものは用例としては加えなかった。

9　仮名との比較において字形上の違いを見出せなかった文字については、当面仮名として扱い、この表には採り上げなかった。その上で、仮名字形と紛れないものについてはその用例数を挙げ、「非仮名字形」と注記した。例、「江」「日」「見」

10　『古来風躰抄』において振り仮名を有する漢字は、「漢字表記例」欄の漢字の下に振り仮名をカタカナで示した。

四、『古来風躰抄』と定家筆三資料との漢字字種についての比較検討

〈表1〉を比較しやすくするために単字の形に単純化して掲げたのが「漢字字種対照表」〈表2〉である。なお、参考のため、前回調査[注1]を行なった定家筆の『更級日記』ならびに『土左日記』の中から、該当する字種を併せて示しておい

た。

さて、重複を嫌わず、各資料ごとの使用漢字字種を列挙すると次の通りである〈表3〉。なお、和訓は原則として省略した。また、漢字に傍線を付したものは、今回扱った四資料の中で、その資料にしか見出せなかった漢字である。

「資料別漢字字種一覧表」〈表3〉

『古来風躰抄』（六一字種）

〔名詞〕秋・天河・嵐・卯・鷽・陰・霞・風・河・川・神・神無月・岸・君・草・今日・事・衣・聲・瀬・田・月・露・名・夏・浪・野・野分・葉・萩・花・濵・春・日・火・光・久方・人・郭公・松・身・峯・宮材・山・山吹・世・世中・渡之原・我・井

〔動詞〕暮・立・引・見・行・忘・渡（わたし）

〔形容詞ほか〕大

〔副詞ほか〕又・我（わが）

〔助詞ほか〕許

『近代秀歌』（五一字種）

〔名詞〕暁・秋・雨・今・色・風・河・神・草・雲・心・氷・衣・時雨・袖・田・月・露・手・時・年・名・夏・葉・花・春・火・人・舟・冬・松・身・水・峯・物・山・夕・世・夜・世中・我

〔動詞〕思・歸・立・吹・別

〔形容詞ほか〕白

〔副詞ほか〕又
〔助詞ほか〕哉・哉（がな）・許

『古今和歌集』（二二〇字種）
〔名詞〕暁・秋・朝（あさ）・葦・朝（あした）・葦引・梓・天河・雨・嵐・池・絲・命・今・色・卯・鷺・内・空蟬・海・浦・江・枝・奥・鏡・籌・影・笠・霞・風・方・桂・河・神・亀・唐・鴈・木・岸・北・昨日・君・霧・蟋蟀・蚕・草・匣・雲・紅・今日・煙・心地・心・事・氷・駒・衣・聲・坂・櫻・五月・里・五月雨・鹿・敷妙・時雨・嶋・霜・白妙・菅・末・関・蟬・袖・田・瀧・竹・橘・織女・谷・旅・玉・誰・千・月・露・鶴・手・時・所・年・隣・友・鳥・名・中・長月・夏・何・浪・波・涙・西・錦・庭・野・葉・羽・萩・橋・花・濵・原・春・春雨・日・火・久方・人・獨・姫・藤・舟・冬・邊・外・星・螢・郭公・枕・松・前・身・道・水・峯・岑・宮・都・昔・虫・梅・紫・目・本・物・紅葉・社・柳・山・山吹・雪・夕・弓・夢・世・夜・世中・渡津海・我・緒・女郎花
〔動詞〕曙・逢・改・有・入・浮・打・怨・老・思・限・返（かへし）・返（かへり）・歸・戀・定・忍・立・尋・馮・流・鳴・嘆・成・始・吹・申・迷・守・行・別・忘・渡（わたり）・折
〔形容詞ほか〕浅・大・悲・苦・戀・白・高・長・深・憂・慄
〔副詞ほか〕如何・更・猶・又
〔助詞ほか〕哉・哉（がな）・釵・鶴・蝶・鞆・南・也・許・覧

『奥入』（二二〇字種）
〔名詞〕秋・朝（あした）・池・家・今・色・上・浦・江・枝・垣・影・風・方・門・河・神・鴈・木・君・霧・草・雲・

紅・煙・子|・心地・心・事・衣・櫻・里・棹|・下|・嶋・白妙・袖・手枕|・橘・誰・千・塵|・月・罪|・露・時・所・年・鳥・名・中・夏・浪・涙・葉・花・春・日・久方・人・舟・冬・外・郭公・枕・松・身・道・水・峯・宮・昔・虫・午|・馬|・梅・物・柳・山・山吹・雪・夕・夢・世・夜・世中・我・荻|

〔動詞〕有・入・打・怨・思・返（かへし）・歸・戀・過|・染|・立・問|・吹・申・巻|・迷・行・忘・渡（わたし）

〔形容詞ほか〕大・悲・戀・白・深・若

〔副詞ほか〕猶・又

〔助詞ほか〕哉・哉（がな）・也・許・覧

さて、以上に掲げた〈表1〉〈表2〉〈表3〉の表からは、まず使用された漢字の字種やその量について、資料間に多少の違いのあることがわかる。

左に、『古来風躰抄』『近代秀歌』『古今和歌集』『奥入』の四資料それぞれにおける和歌の数、和語表記の漢字字種の数、和語表記の漢字全体の延べ字数を掲げる。熟字訓の例は字種としては一つとして数えた。資料は和歌の数の少ないものから並べた。（ただし、ここに挙げた数値には、前述したように漢語や固有名詞の漢字表記例を含めていない。）

	歌数	漢字字種	延べ字数
『近代秀歌』	六八首	五一種	一五七字
『奥入』	三六〇首	一二〇種	七一二字
『古来風躰抄』	六〇五首	六一種	四六〇字
『古今和歌集』	一一一一首	二二〇種	三七一三字

右によれば、大体において、歌の数の多い資料ほど漢字字種・延べ字数も増加する傾向のあることが読み取れる。た

だ、その中にあって『古来風躰抄』のみは、歌数が『奥入』の二倍近くありながら、漢字字種については『奥入』の約半分、延べ字数の上でも『奥入』をかなり下回っている。

いま試みに各資料の延べ字数をそれぞれの歌数で割って、歌一首に対する漢字使用頻度の平均を算出すると、

『近代秀歌』約二・三字　『奥入』約二・〇字

『古来風躰抄』約〇・八字　『古今和歌集』約三・三字

となり、やはり『風躰抄』の漢字使用頻度の低さが目立つのである。（以下、『古来風躰抄』を『風躰』または『風躰抄』、『近代秀歌』を『秀歌』、『古今和歌集』を『古今』または『古今集』と略称する）

そこで、『風躰抄』における延べ字数の少なさをより具体的に把握するために、定家筆の三資料の中でも特に延べ字数の多い『古今集』は除き、『秀歌』『奥入』所収歌と『風躰抄』所収歌とで重出する歌についてその表記を比較した。以下に示すのはその比較の一例である。（用例の下に付した数字は、国歌大観番号。また、和歌中の／は原文における改行位置を示す）

A（『風躰』下一二丁裏）ちはやぶる神のいがきにはふくずも／秋にはあへずうつろひにけり（古今二六二）

a（『奥入』七〇丁裏）ちはやぶる神のいがきにはふくずも／秋にはあへずもみぢしにけり

B（『風躰』下八九丁表）なにはえのもにうづもるゝたまかしは／あらはれてだに人をこひばや（千載六四〇）

b（『秀歌』一二丁裏）なにはえのもにうづもるゝたまかしは／あらはれてだに人をこひばや

C（『風躰』下七丁裏）をりつればそでこそにほへむめのはな／ありとやこゝにうぐひすのなく（古今三二）

c（『奥入』六八丁裏）おりつれば袖こそにほへむめの花／ありとやこゝにうぐひすのなく

D（『風躰』下一五丁裏）たちわかれいなばの山のみねにおふる／まつとしきかばいまかへりこむ（古今三六五）

d（『秀歌』一一丁裏）たちわかれいなばの山の峯におふる／松としきかば今歸こむ

E（『風躰』下三五丁裏）なつにこそさきかゝりけれふぢのはな／まつにとのみもおもひけるかな（拾遺三五一）
e（『奥入』六五丁裏）夏にこそさきかゝりけれふぢの花／松にとのみも思ける哉
F（『風躰』下三九丁裏）あまのはらそらさへさえやわたるらん／こほりとみゆるふゆのよの月（拾遺二四二）
f（『秀歌』一〇丁裏）あまのはらそらさへさえやわたるらん／氷とみゆる冬の夜の月
G（『風躰』下六七丁裏）山ざくらさきそめしよりひさかたの／くもゐにみゆるたきのしらいと（金葉五〇）
g（『秀歌』七丁裏）やまざくらさきそめしよりひさかたの／くもゐにみゆるたきのしらいと
H（『風躰』下七三丁裏）もろともにこけのしたにもくちずして／うづもれぬ名をみるぞかなしき（金葉六六〇）
h（『秀歌』一一丁表）もろともにこけのしたにはくちずして／うづもれぬなをみるぞかなしき

『風躰抄』と重複する歌は『秀歌』に一七首、『奥入』に二一首、計三八首認められたが、この中にはA（a）、B（b）のように、俊成と定家とで用いられた漢字とその位置とが全く一致する（波線部分）歌が『秀歌』に二首、『奥入』に八首認められる。その一方、C（c）以下の歌のように俊成が仮名で表している部分を定家が漢字を用いて表している（波線部分）歌が『秀歌』に一三首、『奥入』に一三首、計二六首と過半数を占める。そして、俊成が漢字で記している部分が定家では仮名書きになっている（波線部分）ものはG（g）、H（h）に掲げた『秀歌』の二首のみである。このように『風躰抄』と『秀歌』『奥入』との重出歌を比較した結果、傾向として、俊成が仮名を使用する程度は定家のそれよりも低い、すなわち俊成は和歌の表記において定家ほどには漢字を用いなかったということが確かめられるのである。

なかでも特徴的と考えられるのは、助詞・助動詞の類であり（〈表2〉参照）、今回の調査で拾い出した一〇種の漢字のうち、『風躰抄』に見られるのは「許（ばかり）」一字であり（しかもこれは他の定家筆の三資料にも見出せるものである）、定家筆の三乃至二資料に共通して見られる「哉（かな）」「哉（がな）」「也（なり）」「覧（らむ）」は『風躰抄』にはまったく見られない。俊成と定家との差はここに最も顕著に現れている。

さらに、『風躰抄』と定家筆三資料との漢字字種の違いに関して、各資料の間で共通する字種と、一資料にのみ出現する「単独使用字種」とを考えてみる。

各資料について、それぞれ他の資料と共通する字種の数ならびにその資料のみの「単独使用字種」の数とをまとめたものが次の表である。

	総字種数	共通字種数				単独字種数
		秀歌との	風躰抄との	奥入との	古今集との	
近代秀歌	五一字	○	二六字（五一％）	四三字（八四％）	五一字（一〇〇％）	○字
古来風躰抄	六一字	二六字（四三％）	○	三五字（五七％）	四七字（七七％）	一三字（二一％）
奥入	一二〇字	四三字（三六％）	三五字（二九％）	○	一〇一字（八四％）	一八字（一五％）
古今和歌集	二二〇字	五一字（二三％）	四七字（二一％）	一〇一字（四六％）	○	一〇〇字（四五％）

（括弧内の％は、総字種に対する共通字種または単独使用字種の占める割合である）

右の表で例えば『秀歌』は、字種数五一、このうち『風躰抄』と一致する字種は二六種（五一字中の五一％）、『奥入』と共通する字種は四三種（五一字中の八四％）、『古今集』と共通する字種は五一種、すなわち『秀歌』に用いられている漢字のすべてが『古今集』にも見出せるということになる。この表によれば、大略、比較の対象となる資料の字種の数が多いほど一致する度合いは高くなる傾向にあることが見てとれる。実際、『秀歌』『風躰抄』『奥入』ともに、共通する字種が最も多く見出せるのは『古今集』との間である。

ところで一方、共通字種の比率が低いものを見るに、『秀歌』『奥入』『古今』の定家自筆三資料においてはいずれも『風躰抄』との一致率が最も低くなっている。このあたりにも俊成と定家との違いが現れていると見ることが出来るのではないだろうか。

そこでその最も端的な例として、定家筆の『秀歌』『古今』『奥入』には共通して存し、『風躰抄』にはその用例が全く見られない漢字字種を、先の〈表2〉によって拾い出すと、次の一九種となる。

今（いま）・色（いろ）・雲（くも）・心（こころ）・袖（そで）・時（とき）・年（とし）・舟（ふね）・冬（ふゆ）・水（みづ）・物（もの）・夕（ゆふ）・夜（よ）・思（おもひ）・歸（かへり）・吹（ふき）・白（しら）・哉（かな）・哉（がな）

（これらの一部は先掲のa～hの歌群のうち、c・d・e・fの歌の波線部分に見える）

これに対して、『風躰』『秀歌』『奥入』に共通して存し、『古今集』にのみ見られないものは○、『風躰』『秀歌』『古今』に共通するもので『奥入』にのみ見られないものは「田」「火」の二種、さらに『風躰』『古今』『奥入』に共通するもので『秀歌』にのみ見られないものは、「君」「事」「浪」「日」「久方」「郭公」「山吹」「行」「忘」「大」の十種である。これらと較べて『風躰抄』の場合の一九種というのは、やはり多いと言わざるを得ない。

しかも、このうち半数以上にあたる次の十二種は、右の三資料のほかに定家の『更級日記』『土左日記』にも共通して見出されるものである。

今・雲・心・袖・時・年・舟・水・物・夜・思・哉（かな）

この十二種の漢字は、結局、定家筆の『秀歌』『古今』『奥入』『更級』『土左』のいずれにも用いられているのであり、これらは定家が平仮名の文章を書き綴る際に多用した、定家常用の漢字と認めても差し支えないものではないかと考える。

そして、これらの十二種の漢字によって表される語が、和歌では比較的多く出現する語であるにもかかわらず、俊成

の『風躰抄』にその漢字表記が一例も見出せないということは、あるいはここに俊成・定家父子の間での平仮名文における漢字使用上の差が現れていると考えてもよいのではないだろうか。

なお、『風躰抄』にのみ見えて定家自筆の三本には見出せない『風躰抄』単独の使用漢字字種は、先の〈表3〉によれば、次の一三種である。

陰（かげ）・川（かは）・神無月（かみなづき）・瀬（せ）・野分（のわき）・光（ひかり）・宮材（みやき）・渡之原（わたのはら）・井（ゐ）・暮（くれ）・引（ひき）・見（み）・我（わが）

これらは「井」（四例）を除けば、他はいずれも一例乃至二例しか見出せないものであり、『風躰抄』においてさえ多用されたとは言い得ないものである。又これらのうち、四種は熟字の形のものである。その内「神無月」「宮材」「渡之原」は、定家筆の資料では「神な月」「宮木」「わたの原」の形をとっている。わずかな例から判断するのは危険であるが、少なくとも右に挙げた例に限っていうならば、俊成が語の意味を尊重して漢字を用いているのに対し、定家は語の読みを明確に示すことを重視している様子が窺える。

ともかく以上述べてきたことによって、俊成と定家との間には平仮名文において漢字使用上の相違が存する、ということがある程度明らかに出来たのではないかと考える。

すなわち、使用字種においても、延べ字数においても、平仮名文で俊成が用いた漢字は定家が用いた漢字よりもはるかに少なく、また、定家が多用した漢字字種の中には、俊成が全く用いていないものも存するということである。俊成は『風躰抄』の和歌の表記にあたって、少なくとも定家ほどには漢字を交えることをしなかったのである。

次に定家筆の『古今和歌集』においてその漢字字種が他の資料より多いことについて若干の考察を加えておく。

左に掲げるのは『秀歌』ならびに『奥入』と『古今集』との重複歌の一部を示したものである。『古今集』においては

短歌一首を一行に書くのが原則であったようで、行末に至って納まり切らなくなった歌は行末の行間に書き込んでおり、極力、一行で済ませようとした様子が窺える。

I（『奥入』一一二丁裏）おりつれば袖こそにほへ梅花／ありとやこゝにうぐひすのなく（／は改行位置を示す。以下同じ）

i（『古今』春上三二）　折つれば袖こそにほへ梅花有とやこゝにうぐひすのなく

J（『秀歌』九丁裏）　おく山にもみぢふみわけなくしかの／こゑきく時ぞ秋はかなしき

j（『古今』秋上二一五）　おく山に紅葉ふみわけなく鹿のこゑきく時ぞ秋は悲き

K（『奥入』二四丁表）　伊勢のうみにつりするあまのうけなれや／心ひとつをさだめかねつる

k（『古今』恋五〇九）　伊勢の海につりするあまのうけなれや心ひとつを定かねつる

L（『奥入』四一丁表）　たれをかもしる人にせむたかさごの／まつもむかしのともならなくに

l（『古今』雑上九〇九）　誰をかもしる人にせむ高砂の松も昔の友ならなくに

このように『秀歌』『奥入』では二行に書かれた歌が『古今集』では一行に納まるよう記されている。ところでこれらの例のうち、iの「折」、jの「鹿」、kの「海」「定」、lの「友」は、俊成の『風躰抄』や定家の他の二資料には見出せない『古今』単独使用漢字である。『古今集』において、このような漢字は、全部で一〇〇字種も存する。なかでも特徴的なのは助詞・助動詞の表記においてであり、今回の四資料において用いられた漢字一〇種（〈表2〉参照）のうち「鈒」「鶴」「蝶」「鞆」「南」の五種は『古今集』にのみ見える漢字である。一首一行という条件が『秀歌』『奥入』を記した同じ筆者をしてこのような多様な字種を使用させた原因となっているのではないかと考える。

右の点についてさらに『奥入』の和歌の表記から考えてみよう。

『奥入』の単独使用漢字は次の一八種である。

家・上（うは）・垣・門・子・棹・下（した）・手（た）・塵・罪・午・馬・荻・過・染・問・巻・若

このうち「家」「問」以外はそれぞれ一回しか使用されていない。そして、例えば次の歌のように、一部の漢字にはその出現のしかたにある偏りが認められるのである。

m（『奥入』四八丁表）秋は猶夕まぐれこそたゞならね荻上風萩下風

n（『奥入』四八丁表）をとめごが袖振山のみづ垣のひさしき世より思染てき

さきに挙げた『奥入』単独字種一八種のうち、mの歌に「荻」「上」「下」の三字が、nの歌に「垣」「染」の二字が集中して見えている。この両歌が記されている四八丁表の紙面は詩文や和歌がぎっしりと書き込まれた一面であり、m・nともに一行に記されている。『古今集』で見たのと同じ状況が認められるのである。ほかに「罪」「過」も一行に詰められた歌に見出せる例である。また「問」の二例のうち一例は紙面の余白に書き込まれた例である。

このように、紙面の制約を受けて漢字を多用する傾向があることが『古今集』『奥入』に認められ、『古今集』における漢字字種ならびに延べ字数の増加は、単に和歌の量の多さによるのみではなく、一首一行の制約が強く影響していたものと考える。

五、異字同訓・同字異訓例についての検討

さて、次に漢字と和訓との対応について考えるため、今回扱った四資料における漢字と和訓との対応関係を、先の〈表1〉〈表2〉および〈表3〉の一覧表をもとに、整理してみた。その結果、個々の資料においては、一つの漢字が一つの和訓に対応する形での一対一の対応関係を有するものが大部分を占めており、一語に対して互いに異なる漢字が用いられる「異字同訓」、あるいは相異なる語が同じ漢字で表される「同字異訓」などの例外は少ないことがはっきりした。また資料相互の間においても〈表2〉に見られるように、複数の資料に共通する語に対して互いに異なる漢字が用いられ

たり（異字同訓）、あるいは相異なる語が同じ漢字で表されたり（同字異訓）したものは極めて少なく、結局、俊成の『古来風躰抄』以下四資料全体において、漢字と和訓とは、一対一のほぼ安定した関係にあったことが知られる。その中にあって、例外となる「異字同訓」「同字異訓」の例は次の通りである。

「異字同訓」（九組）

①「河」「川」（かは）……『風躰抄』内における異字同訓の例

②「蟋蟀」「蛬」（きりぎりす）　③「浪」「波」（なみ）　④「峯」「岑」（みね）

⑤「宮こ」「都」（みやこ）　⑥「返」「歸」（かへり）……『古今集』内における異字同訓の例

⑦「馬」「午」（むま）……『奥入』内における異字同訓の例

⑧「あか月」「暁」（あかつき）　⑨「影」「陰」（かげ）……『風躰抄』と他の定家筆資料との間における異字同訓の例

「同字異訓」（五組）

⑩「われ」「わが」（我）……『風躰抄』内における同字異訓の例

⑪「あした」「あさ」（朝）　⑫「かへし」「かへり」（返）……『古今集』内における同字異訓の例

⑬「わたり」「わたし」（渡）　⑭「かな」「がな」（哉）……定家筆資料相互の間における同字異訓の例

右に記したように、ほとんどは、各資料内における異字同訓・同字異訓であり、俊成の『風躰抄』と定家筆三資料との間で、違いを見出せるものは⑧⑨の二組の異字同訓例だけである。

右の一四組について、若干の検討を試みた。

①「河」「川」（かは）

先掲の如く『風躰抄』に現れるもので、『風躰抄』における異字同訓はこれのみである。「かは」の語の漢字表記は左の如く四例見られ、うち三例が「河」（a～c）、一例が「川」（d）の表記である。

a○河風のすゞしくもあるかうちよする　なみとゝもにや秋はたつらん（『風躰抄』下一一丁表）
b○龍田河もみぢみだれてながるめり　わたらばにしきなかやたえなん（同　下一三丁裏）
c○みわたせば浪のしがらみかけてけり　卯花さける玉河のさと（同　下五〇丁裏）
d○春がすみたつやおそきと山川の　いはまをくゞるおときこゆなり（同　下四七丁表）

ともに熟字の形であり、単純な比較は出来ない。なおこの他に、地名として除外した用例の中に次のような例が見られる。

e○ちのなみだおちてぞたぎつ白川は　きみがよまでのなにこそありけれ（同　下一九丁裏）

一方、定家自筆の三資料および同じく定家筆の『更級日記』『土左日記』においては、すべて「河」字が用いられており、「川」字の用例はない。

俊成の『風躰抄』におけるこの「川」字の使用を、俊成と定家との筆者の違いを表すものと考えてよいかどうかについては、なお今後の課題としなければならないが、少なくとも定家には徹底して「河」一字を用いようとする様子が窺えるのに対し、俊成は「河」「川」両字の併用についてそれほどのこだわりは持っていなかったように見える。

次の②から⑥まではすべて『古今集』における異字同訓の例である。

②「蟋蟀」「蛬」（きりぎりす）

左に掲げたように、用例数も「蟋蟀」二例（a・b）、「蛬」一例（c）と大きな差はなく、意味の上でも特に違いは認められないようである。（用例末尾の括弧内の数字は国歌大観番号を示す）

a○蟋蟀（蛬イ）いたくなゝきそ秋の夜の　長き思ひは我ぞまされる（『古今集』秋一九六）

※「蛬イ」は校異としての書き込みである。

b○秋風にほころびぬらしふぢばかま　つゞりさせてふ蟋蟀なく（同　雑体一〇二〇）

c○もろともになきてとゞめよ蚕　秋のわかれはおしくやはあらぬ（同　離別三八五）

『和名類聚抄』（元和版。以下同じ）にも「兼名苑云、蟋蟀〈悉率二音〉一名蚕〈渠容反一音挾、和名木里木里須〉」（巻十九、蟲豸類。なお用例中の〈　〉は割注であることを示す。以下同じ）と二表記が並記されており、そこに何らかの差異があるとは考えられない。ただし、『古今集』一九六の歌には「蟋蟀」の傍らに「蚕イ」の注記があることから考えると、定家にとってこの両表記の違いは見過ごしにはできなかったことのようである。

次の③の「浪」と「波」、④の「峯」と「岑」、⑤の「宮こ」と「都」とであるが、これらは漢字の使用頻度において偏りがあり、いずれも前に挙げた「浪」「峯」「宮こ」の表記が多数を占め、後の「波」「岑」「都」の用例はわずかしか見出せないものである。

③「浪」「波」（なみ）

「浪」の例が四〇例見られる（a・b）のに対し、「波」は三例のみ（c～e）で、しかもいずれも「藤波」の語を表すのに用いられている。

a○さくら花ちりぬる風のなごりには　水なきそらに浪ぞたちける（『古今集』春八九）

b○草も木も色かはれどもわたつうみの　浪の花にぞ秋なかりける（同　秋二五〇）

c○わがやどにさける藤波たちかへり　すぎがてにのみ人の見るらむ（同　春一二〇）

d○わがやどの池の藤波さきにけり　山郭公いつかきなかむ（同　夏一三五）

e○み吉野ゝおほかはのへの藤波の　なみにおもはゞわがこひめやは（同　恋六九九）

『奥入』や『更級日記』においては「浪」のみが用いられている。

『土左日記』には「浪」が二三回見られるが、その他に一例「風波」の例（f）が見えている。

f○五日　風波やまねば猶おなじ所にあり（『土左日記』七丁裏）

また俊成の『風躰抄』においても、「浪」は認められるが「波」の使用はない。俊成や定家の平仮名文においては「波」よりも「浪」字を用いる方がより一般的な用字であった。

『古今集』の「藤波」も『土左日記』の「風波」も共に二字の漢字から成る熟字中に用いられており、しかも下位に位置している。単純語「なみ」を表すのに「波」が単独で用いられた例は今回の調査では見出せなかった。あるいは定家は、仮名の「は」の字形と紛れることを嫌って「なみ」の表記に「波」を用いなかったのではあるまいか。なお検討を要する点である。

④「峯」「岑」（みね）

「峯」が七例（a・b）、「岑」が一例（c）である。

a○風ふけば峯にわかるゝ白雲の　たえてつれなき君が心か（『古今集』恋六〇一）

b○鴈のくる峯の朝霧はれずのみ　思ひつきせぬ世中のうさ（同　雑九三五）

c○白雲のたえずたなびく岑にだに　すめばすみぬる世にこそ有けれ（同　雑九四五）

『和名類聚抄』にも「峯　祝尚丘曰、峯敷容反〈和名三禰〉。又用下二字、岑音尋、嶺音領山尖高處也」（巻一、山谷類）と両様の表記が見出せる。

「峯」の字は、俊成の『風躰抄』に一例、定家の『秀歌』に二例、『奥入』に三例見えており、一方の「岑」字は『古今集』の一例のみで、他には見出せない。

⑤「宮こ」「都」（みやこ）

「宮こ」が一一例と多用されており（a・b）、対する「都」は一例のみ（c）である。

a○宮こまでひゞきかよへるからごとは　浪のをすけて風ぞひきける（『古今集』雑九二一）

b○わがいほは宮このたつみしかぞすむ　世をうぢ山と人はいふ也（同　雑九八三）

c○都いでゝ今日みかの原いづみ河　かは風さむし衣かせ山（同　羇旅四〇八）

『更級日記』にも「宮こ」が二例用いられており、定家の平仮名文においては「宮こ」の方がより一般的な用字であったと考えられる。

⑥「返」「歸」（かへり）

「返」は「立返り」の語形で一例存するだけである（a）。また、「歸」も五例のうち四例が「立歸り」の例である（b～e）。

a○わたつみのわが身こす浪立返り　あまのすむてふうらみつる哉（『古今集』恋八一六）

b○立歸りあはれとぞ思よそにても　人に心をおきつ白浪（同　恋四七四）

c○逢事のなぎさにしよる浪なれや　怨てのみぞ立歸ける（同　恋六二六）

d○いしま行水の白浪立歸り　かくこそは見めあかずもある哉（同　恋六八二）

e○いにしへに猶立歸心哉　こひしきことに物わすれせで（同　恋七三四）

双方を比較するに、「立歸」の例のうちb・dの二例は「浪」との関連において用いられ、また「くり返し」の意の掛詞にもなっており、その点でaの「立返」と意味・用法上の相違はない。

また、「立歸」は『奥入』や『更級日記』にも見られる（f・g）。

f○あらたまの年立歸朝より　またるゝ物はうぐひすのこゑ（『奥入』一五丁裏）

g○はつせ河立歸つゝたづぬれば　すぎのしるしもこのたびや見む（『更級日記』七八丁表）

定家の平仮名文においては「立歸」の表記が主であったことがわかる。

⑦「馬」「午」（むま）

『奥入』に見える異字同訓の例であるが、次の用例から知られる通り、この両者の書き分けは意味の違いを反映したも

のである。

a○山しろのこはたのさとに馬はあれど（『奥入』一一六裏）

b○けふも又午のかひをぞふきつなる　ひつじのあゆみちかづきぬらむ（同　一一八表）

bの「午のかひ」は正午を告げるほら貝のことであるから、動物の「馬」とは表す内容が異なっている。

以上は、各資料内における異字同訓の例であったが、次の⑧「あか月」「暁」と⑨「影」「陰」とは、俊成の『風躰抄』と定家筆の資料との相違として出現するものである。

⑧「あか月」「暁」（あかつき）

「あか月」が『風躰抄』に一例（a）、それに対して「暁」が『秀歌』に一例（b）、『古今集』に三例（c～e）存する。

a○みやまいでゝよはにやきつるほとゝぎす　あか月かけてこゑのきこゆる（『風躰抄』下一〇丁裏）

b○ありあけのつれなく見えし別より　暁許うき物はなし（『秀歌』一四丁裏）

c○有あけのつれなく見えし別より　暁許うき物はなし（『古今集』恋六二五）

d○ほとゝぎす夢かうつゝかあさつゆの　おきて別し暁のこゑ（同　恋六四一）

e○暁のしぎのはねがきもゝはかき　君がこぬ夜は我ぞかずかく（同　恋七六一）

しかしこの他に、『風躰抄』の詞書に「暁」の例が見られ（f）、逆に定家の『更級日記』には「あか月」の例が一〇例も見られる（g）ので、この表記の差を個人の違いに起因するものと断定することは出来ない。

f○中関白のいみに方興院こもりて　暁　千鳥のなくをきゝてよみ侍ける（『風躰抄』下六四丁裏）

g○あか月をなにゝまちけむ思事　なるともきかぬかねのをとゆへ（『更級日記』六六丁裏）

今は「あか月」「暁」両様の表記が存することを指摘するにとどめたい。

⑨「影」「陰」（かげ）

「陰」が『風躰抄』に一例（a）、「影」が『古今集』に一七例（b～d）、『奥入』に二例（e）見えている。

a○松陰のいはゐのみづをむすびあけて　なつなきとしとおもひけるかな（『風躰抄』下三六丁裏）

b○吉野河岸の山吹ふくかぜに　そこの影さへうつろひにけり（『古今集』春一二四）

c○このまよりもりくる月の影見れば　心つくしの秋はきにけり（同　秋一八四）

d○戀すればわが身は影と成にけり　さりとて人にそはぬ物ゆへ（同　恋五二八）

e○あすか井にやどりはすべし影もよし　みもひもさむしみまくさもよし（『奥入』六丁表）

右のうちaの「松陰」は、例に見られる通り、「物の陰」すなわち光の当たらない暗い部分を表している。それに対してb以下の「影」は、月の光、あるいは光線によって作り出される影法師、また水などに映った映像を表しているのであり、この両字の使用は意味による書き分けの結果と考えることが出来よう。

以上の異字同訓例について、その両字種の用法上の違いを整理すると次のようになる。

(1)両字種が、意味の違いによって使い分けられていると考えられるもの……⑦⑨

(2)両字種の間に、使用頻度の上ではっきりした偏りが見られるもの……③④⑤⑥

(3)両字種の間に、明確な差が見出せなかったもの……①②⑧

俊成筆の『風躰抄』と定家筆の三資料との間に見られる異字同訓例二組のうち、一組は意味の違いに拠る使い分けと考えられるものであり、もう一組は明確な差が見出せなかったものであって、結局、同訓の二字種の違いが、俊成と定家の筆者の違いに基づくと判断できる例はなかった。むしろ、③④の「浪」「峯」のように、『風躰抄』に用いられたこれらの漢字は、定家の『古今集』においても多用されているのであり、その点で俊成と定家との間には共通性が認められた。

ただし、①の『風躰抄』の「河」「川」両字の使用については、定家筆の資料における「河」字使用の徹底ぶりから逆に、非「定家」的なものが窺われた。

次に「同字異訓」の例について検討する。

⑩「われ」「わが」（我）

これは『風躰抄』内に見られるものであり、「われ」の例が二例（a・b）、「わが」の例が一例（c）である。

a○我ならぬくさばもゝのはおもひけり　そでよりほかにおけるしらつゆ（『風躰抄』下三二丁裏）

b○いさきよにそらのけしきをたのむかな　我まどはすれ秋のよの月（同　下七四丁表）

c○我やどゝたのむよしのにきみしいらば　おなじかざしをさしこそはせめ（同　下三〇丁裏）

定家筆の『秀歌』『古今集』『奥入』などでは「我」字は「われ」としか訓まれない。特に『古今集』では「われ」（「われら」も含む）七九例のうち漢字の「我」で表されたものが七七例あり（d）、仮名で「われ」と記されたものはわずか二例に過ぎない。しかもそのうちの一例（e）は、いわゆる変字法によって直前の歌（d）の「我」に対して仮名を用いて表記したものと考えられるものである。

d○我をのみ思ふといはゞあるべきを　いでや心はおほぬさにして（『古今集』雑体一〇四〇）

e○われを思ふ人をおもはぬむくひにや　わが思ふ人の我をおもはぬ（同　雑体一〇四一）

そして一方の連体詞「わが」は一三四例すべて仮名で表されている。このような書き分けは『更級日記』にも見られるのであり、定家においては「我」字は「われ」の表記にのみ用いる漢字であったことが十分に考えられるのである。

これに対し、俊成の場合は、「われ」「わが」共に「我」を用いて表している。用例も少なく、はっきりとしたことは言い難いが、「われ」と「わが」とは共に共通する語基「わ」を持っており、自称の代名詞としての基本的な意味も同じ

であるので、少なくとも定家ほどには明確な書き分け意識はなかったものと考えられる。

⑪「あした」「あさ」（朝）

これは『古今集』において見られるものである。

a○ほの〴〵と明石の浦の朝霧に　嶋がくれ行舟をしぞ思（『古今集』羇旅四〇九）

b○鴈のくる峯の朝霧はれずのみ　思ひつきせぬ世中のうさ（同　雑九三五）

c○霧立て鴈ぞなくなる片岡の　朝の原は紅葉しぬ覧（同　秋二五二）

d○はかなくて夢にも人を見つる夜は　朝のとこぞおきうかりける（同　恋五七五）

e○今こむといひてわかれし朝より　思ひくらしのねをのみぞなく（同　恋七七一）

f○近江よりあさたちくればうねのゝに　たづぞなくなるあけぬこのよは（同　大歌所一〇七一）

右の用例からも知られる通り、「あさ」と訓む例二例（a・b）は「朝霧」という熟字の形をとっており、単独で用いられた「朝」字三例（c～e）は皆「あした」と訓むべき例である。単純語「あさ」の例も二例存する（たとえばf）が、それらは皆仮名で表記されている。これも用例が少ないので確かなことは言えないが、定家は、単純語の「あした」を表す際に漢字の「朝」を用い、同じく単純語の「あさ」を表す場合には平仮名を用いるといったような書き分けの意識を持っていたのではないだろうか。

⑫「かへし」「かへり」（返）

これも『古今集』における同字異訓の例である。

a○いとせめてこひしき時はむば玉の　よるの衣を返してぞきる（『古今集』恋五五四）

b○わがせこが衣のすそを吹返し　うらめづらしき秋のはつ風（同　秋一七一）

c○花の色はたゞひとさかりこけれども　返ゞぞつゆはそめける（同　物名四五〇）

d○唐衣ひもゆふぐれになる時は　返ゞぞ人はこひしき（同　恋五一五）
e○わたつみのわが身こす浪立返り　あまのすむてふうらみつる哉（同　恋八一六）

なお定家の『更級日記』『土左日記』には、「返こと」の例がそれぞれ六例（f）と一例（g）見えている。

f○宮にかたらひきこゆる人の御もとよりふみある　返ごときこゆるほどに（『更級日記』八〇丁裏）
g○あるひとあさらかなるものもてきたり　よねして返ごとす（『土左日記』三九丁裏）

「かへし」「かへり」は互いに「かへ」を語基として共有する語であり、〈事物を前の状態とは逆の状態にする。または、そういう状態になる〉という基本的な意味においても同じと考えられるから、同じ「返」字を用いても特に不都合はなかったであろう。さらに訓みについても「り」「し」を送り仮名として加え、あるいは「返ゞ」のように複合語形をとることで区別は出来たであろう。

f・gの「返ごと」の例をも含めて考えると、少なくとも定家においては、「かへし」「かへり」両語の表記を「返」一字をもってすることについて特に不都合は感じなかったのではないかと思われる。

⑬「わたし」「わたり」（渡）

これは『風躰抄』『奥入』と『古今集』とで訓みが相違する例である。すなわち「わたし」の例が『風躰抄』と『奥入』に各一例（a・b）、「わたり」の例が『古今集』に九例（c・d）見える。

a○見渡せばやなぎさくらをこきまぜて　みやこぞ春のにしきなりける（『風躰抄』下八丁裏）
b○打渡すをち方人に物申すわれ　そのそこにしろくさけるはなにの花ぞも（『奥入』一一丁裏）
c○秋霧のともにたちいでゝわかれなば　はれぬ思ひに戀や渡む（『古今集』離別三八六）
d○なにはがたしほみちくらしあま衣　たみのゝ嶋にたづなき渡（同　雑九一三）

『風躰抄』と『奥入』に共に「わたし」と訓む例が存する以上、筆者による使い分けがあったとは考えられない。この

「渡」字の両様の訓みも、ともに「わた」という語基を含んでおり、⑫の「返」と同様に考えることが出来よう。

⑭「かな」「がな」（哉）

この「哉」字は『風躰抄』には用いられておらず、定家筆の三資料に見えるものである。

a○秋の露やたもとにいたくむすぶらん　ながき夜あかずやどる月哉（『秀歌』八丁裏）

b○をちこちのたづきもしらぬ山なかに　おぼつかなくもよぶこどり哉（『古今集』春二九）

c○かずならぬ身のみものうくおもほへで　またるゝまでもなりにける哉（『奥入』二七丁表）

d○いかにせむゝろのやしまにやども哉　こひのけぶりをそらにまがへむ（『秀歌』一三丁表）

e○みゝなしの山のくちなしえてし哉　思ひの色のしたぞめにせむ（『古今集』雑体一〇二六）

f○いにしへのしづのをだまきくりかへし　むかしを今になすよしも哉（『奥入』二七丁表）

右の例でa～cは詠嘆の終助詞「かな」、d～fは願望の終助詞「がな」を表した例である。両語を同じ「哉」で表すのは文意理解にはあるいは妨げともなるかと思われるが、『秀歌』においては「かな」として五例、「がな」として一例、『古今集』では「かな」五五例、「がな」一一例、『奥入』では「かな」一〇例、「がな」七例の用例が見られ、定家筆のこの三資料においては、使用頻度の開きはあるものの「がな」としての用例も少なくはない。定家のこのような漢字使用は、いわゆる「あて字」に通じるものであろうが、さらに言えば、当時の平仮名文において清濁による仮名文字の書き分けがなされなかったことが、「かな」を表す「哉」字を同じ終助詞としての働き（すなわち『手爾葉大概抄』などでいう「言ひ切り」に用いられる）を持つ「がな」に通用させたと見ることができよう。

以上検討してきた同字異訓例を整理すると次のようになる。

(4)単独で用いられる場合と、熟字の形で用いられる場合とで訓が異なると考えられるもの……⑪

(5)異訓ではあるが同一の語基を有しており、ことさら別字をもって書き分ける必要がなかったと考えられるもの……⑩⑫⑬

(6)訓の違いが清濁の違いのみであって、仮名と同様に清濁に通用させて用いられたと考えられるもの……⑭

右の通りであり、訓の違いが俊成と定家の筆者の違いを反映していると思われる例は見出せなかった。

ただし、『風躰抄』において「我」字を「われ」「わが」双方の表記に用いることについては、定家筆資料における「我」が「われ」の表記に専用されている事実から、むしろ非「定家」的な一面を示していると考えられた。

さて以上、異字同訓ならびに同字異訓の例を検討してきたが、そのいくつかについては、ある程度その用法上の違いや背景を考えることが出来たように思う。

すなわち、異字同訓例の場合、両表記の間に意味や使用頻度の上ではっきりした違いが認められたものが多かった。また同字異訓例にあっては、その「異訓」の内容が、同一語基を含むものや清濁の音の違いに過ぎないものであったりした場合は、音形が違っていても意味の上で共通性があれば、同じ漢字を用いていた。

また、これらの検討を通して、俊成筆の『風躰抄』と定家筆の三資料とで異なる様相を見せるものとして次の二点が浮かび上がってきた。

ア、「かは」の表記において、『風躰抄』は「川」の字をも使用するのに対して、定家筆資料では「川」は用いない。

イ、『風躰抄』では、「我」の漢字を「われ」「わが」両語を表すのに用いているが、定家筆資料では「われ」の表記に限って用いている。

六、まとめ

これまで、『風躰抄』と定家筆三資料とについて、その漢字字種や使用頻度の比較、漢字と和訓との対応関係、また例外となる用例の検討をおこなってきた。その結果、次のことが判明した。

I　俊成筆『古来風躰抄』と定家筆『近代秀歌』『古今和歌集』『奥入』との共通点として、

a　各資料に存する漢字については、その漢字と和訓との対応関係にほぼ一対一の関係が認められ、筆者の違いによる和訓の違いはほとんど認められなかった。

b　右に対する例外となる異字同訓例、同字異訓例についても、その多くは、意味や使用頻度の上で差があったり、あるいは、同一語基を共有しており書き分けの必要がないと考えられるものであった。

II　俊成筆『古来風躰抄』と定家筆『近代秀歌』『古今和歌集』『奥入』との相違点として、

c　使用された漢字字種の量にかなり差があり、『古来風躰抄』は定家筆の三資料ほどには漢字を用いてはいない。特に、定家筆資料に多用される「今」「雲」「心」「袖」「物」「夜」「思」など、また、助詞・助動詞の「哉（かな）」「哉（がな）」「也（なり）」「覧（らむ）」、これらの漢字表記は、『風躰抄』には全く認められない。

d　「かは」の表記について、定家筆資料では「河」字のみを用いているのに対し、『古来風躰抄』では「河」「川」両表記の併用が見られる。また、「我」を定家筆資料では「われ」の表記に限って用いているのに対し、『古来風躰抄』では「われ」「わが」どちらにも用いている。

e　漢字全体の使用頻度においても、『古来風躰抄』は、定家筆資料のそれを下回っている。

以上である。

俊成の和歌における和語表記の漢字と定家のそれとを比較した結果、右のような結論を得た。これによれば、俊成が

用いた漢字と定家が用いた漢字とは、その字種の数や頻度については明らかな差があったものの、漢字とそれに対する和訓との関係においては、ほとんど違いはないと認められた。少なくとも和歌の表記にあっては、漢字と和訓との結び付きについて、俊成と定家との個人の違いを超えた比較的安定した基盤があったと考えられる。

しかし、今回扱った資料以外にも定家筆の資料は多く、なお調査を続ける必要を痛感する。

（一九九四・一二・二四）

注

（1）拙稿「藤原定家自筆平仮名文三種における和語表記の漢字」（『鎌倉時代語研究』第一輯　昭和五三年三月）
（2）石田吉貞博士『藤原定家の研究』改訂版（昭和四四年三月）
（3）国書刊行会『明月記』による。以下同じ。
（4）冷泉家時雨亭叢書『古来風躰抄』谷山茂博士・赤瀬信吾氏解題
（5）武蔵野書院『近代秀歌』（影印本）久松潜一博士解説
（6）『藤原定家筆古今和歌集　別巻』久曽神昇博士解説
（7）日本古典文学会『奥入』山岸徳平博士解題

追記　本稿は、平成三年・四年・五年の鎌倉時代語研究集会において口頭発表した内容をもとにまとめたものである。発表の席上、小林芳規先生はじめ諸先輩、諸兄より有益な御助言を賜ったことに対し、この紙面を借りて、厚く御礼申し上げる。
また、論者が一学生であった頃から、常に学問・研究の醍醐味を語って私どもの研究への意欲と自負を与え続けて下さった、故　佐々木　峻　先生の御冥福を　謹んでお祈り申し上げます。

「漢字用例一覧表」〈表1〉

和訓	漢字表記例	「古来風躰抄」	「近代秀歌」	「古今集」	「奥入」
〔名詞〕					
あかつき	暁		一	三(cf. つき)	
あき	秋	二九	七	一〇一	一八
	秋風	五	三	一七	
	秋霧			一	
	秋きり			六	
	秋しのや〈枕詞〉		一		
	秋田			一	
	秋はき	二		六	一
あさ	朝霧			二	
あし	葦邊			一	
あした	朝			三	一
あしひき	葦引の〈枕詞〉			五	
あづさ	梓弓			四	
あまのがは	天河	一		三(cf. かは)	
あめ	雨		一	一〇	
あらし	嵐	一		二	
いけ	池			四	二
いと	絲			一	
いのち	命			一	
いへ	家				二
いま	今		一	四四	六
	今更に			五	

今さらに　一
今は　二
いろ
色　二　五三　四
色つき　一　三
色つく　一
花色衣　一
う
卯花　一
卯のはな　一
鷽　一　一二
うぐひす
うち　六
うつせみ
うは　空蟬
うみ　上風　五
海　一
有そ（荒磯）海　三
わたつ海　一
うら
浦　二　九　一
浦風
浦浪　一
え
入江　一（非仮名字形）
ほり江　一（非仮名字形）　一
えだ
枝　四
おく
奥山　三
かがみ
鏡　一
鏡山　一
かがり
篝火　一

かき	みつ垣				一
かげ	影		一三		一
	月影		四		一
かげ	松陰	一			
かさ	笠		二		
かすみ	霞「カスミ」	一			
	霞		七		
	春霞		一七		
かぜ	風	一四	四五		七
	秋風	五	一八		
	あまつ風	一			
	上風			一	
	浦風			一	
	うら風	三			
	おきつ風	一			
	河風	一	一		
	かは風	一	一		
	神風	一			
	このした風	一			
	した風	一			
	谷風		一		
	野風	一	一		
	ゝ(の)風		一		
	はつ風	一	一		
	はま風	一			

春風	二		一	
松風	一			一
山風	二		二	
山した風			一	
をきのは風	一			
かた			一七	四
方				
せむ方			一	
行(き)方			一	一
ゆく方				
をち方人			一	一
かつら				
桂			一	
かど				
門			一	
かは				
河			九	二
			三(cf.あまのがは)	
あまの河				一
いさら河				
いつみ河			一	
宇治河				一
大河				一
大井河			一	
おもひ河		一		
河風	一		一	
河霧			一	
河きり			一	
河邊			一	
すゝか河				一

せり河　一　一
龍田河　一　五
たつた河　三
玉河　一
名とり河　一
なとり河　一
涙河　六
なみた河　一
はつせ河　一
ひのくま河　一
ふち河　一
冬河　一
ほそたに河　一
みたらし河　一
みなせ河　三
みもすそ河　一
もかみ河　一
山河　三
山川　一
吉野河　五
よと河　一
わたり河　一
神　二
かみ　八　一
神（雷）　二
いその神〈地名〉　二　一
一　五

一五七

神かき		一	一	
神風	一			一
神さひ		一	一	
神な月		七		一
神なつき	一（cf. かみなづき）			
神なひ〈地名〉	二	四		一
神なひ山		一		
神世		二		
神よ	二			
神無月	二			
かみなづき				
かめ				
から				
亀		一		
唐紅		二		
唐衣		九		
唐錦		一		
鴈		三		二
かり				
き		八		一
木		二		
木ゝ		三		
草木				
くち木		一		
はゝ木ゝ				一
宮木	一（cf. みやき）			
宮木の〈地名〉	二			
むもれ木	一			
岸	六			
北	一			
きし				
きた				

きのふ	昨日		一	一
きみ	君	一	六七	
	わか君		一	
きり	霧		二	一
	秋霧		一	
	朝霧		二	
	河霧		一	一
	夕霧		二	
きりぎりす	蟋蟀		一	
	蚤		一四	二
くさ	草		四	一
	うき草			
	おもひ草	一	三	
	草木			
	草葉	一		
	草は		三	
	草枕		一	
	草むら		一	
	した草		一	
	月草	一	二	一
	夏草		二	
	はつ草			一
	ひとつ草		一	
	人忘草		一	
	深草〈地名〉		二	二

冬草　二
若草
わか草　一　一
忘草「ワスレクサ」
忘草　四
玉匣　二
雲　一三
あま雲　一
雲井
雲ゐ　三
白雲　一〇
紅　六　二
唐紅　二
から紅　一
今日　一
煙　四
子
心地　三
心ち　二
たひ心ち　一
なに心地　一
心　二
あたし心　一
うつし心　一
心かへ　一

くしげ
くも

くれなゐ

けふ
けぶり
こ
ここち

こころ

心さし　一
心つから　一
心つくし　一
心はせ　一
心ほそく　一
心み〈名詞〉　二
心み〈未〉　一
心み〈用〉　一
心みよ〈令〉　一
しっ心　一
事　三八　一六
事(言)　一〇
事(言)って　一
事のは(言葉)　九　一
たのめ事　一
氷　二
駒　一
衣　四　一　五
あま衣　一
唐衣　九
から衣　一
かり衣　一
衣かせ山　一
衣手　四
しほやき衣　一　一
こと
こほり
こま
ころも

すて衣			二	一
すり衣			一	一
夏衣			二	
花色衣			二	
藤衣			一	
ふち衣			二	一
山わけ衣			一	
聲			六	
一聲	一			
坂			一	
櫻			五	一
櫻花			八	一
五月			一（cf. つき）	
里			一	
山里			三	一
棹				
五月雨			二	
鹿			一	
敷妙の〈枕詞〉			一	
時雨	一		〇	
はつ時雨			一	
下露				
嶋			三	一
玉津嶋				
霜			二	一
こゑ				
さか				
さくら				
さつき				
さと				
さほ				
さみだれ				
しか				
しきたへ				
しぐれ				
した				
しま				
しも				

しろたへ	はつ霜	一	二	一
すが	白妙の〈枕詞〉	二	一	
する	菅	一		
	末	一		
せ	本末	一		
せき	瀬	二		
	関	四		
	関守	一		
せみ	蟬	四		
そで	袖	二七		一八
たまくら	手枕	一		
た	田	一		
	秋田	四		
	あらを田	一		
	かと田	一		
	山田	五		
たき	瀧	二		
たけ	竹	一		
	くれ竹	三		
	竹のこ	一		
	なよ竹	一		
たちばな	花橘	二		一
	山橘	一		
たなばた	織女	一		
たに	谷	五		

たび　谷風　一
　　旅　一
たま　玉　七
　　白玉　五
　　しら玉　一
　　玉かつら　一
　　玉匣　二
　　玉たれ　一
　　玉の緒　一
　　玉のを　二
　　むは玉の〈枕詞〉　一
たれ　誰　五　二
ち　千ゝ　一
　　千くさ　一
　　千鳥　二
　　千世　四　一
　　濵千鳥　一
ちり　塵
つき　月　二八　一二
　　あか月(暁)　一
　　さか月(杯)　一
　　神な月　六　二
　　さ月　四(cf.さつき)　一
　　さ月山　一
　　さ月やみ(五月闇)　三

月かゝり	一		四	一
月影	四	一	一	一
月かけ	一			
月草	一		二	一
月なみ				
月日				
月ひ				
月夜				
月よ				
年月				
なか月	一			
みか月			一	
もち月	一			
つみ				
罪				
つゆ				
露		二	四	
あさ露			二	
下露				
白露		一	七	一
露けし〈形容詞〉	一		一	
鶴			二	
つる				
手		一	四	
て				
衣手				
時		一	七	七
とき				
時はの山				一
ひと時			一	

ところ	所	三	三	
とし	年	一	三六	二
	年月		二	
	年のを		一	
となり	隣		一	
とも	友		一	
とり	友(共)		二	
	鳥		二	一
	いなおほせ鳥		一	
	千鳥		二	
	とを山鳥			一
	にほ鳥		一	
	濵千鳥		一	
	ゆふつけ鳥		三	
	ゝ(を)し鳥		一	
な	名	二	二三	三
	名とり河	一	一	
なか	中		六	二
	中かき			一
	中そら		一	
	中〳〵に〈副詞〉		二	
	中山		三	
	野中		一	
	よの中			一
ながつき	長月		一	

なつ　夏　五　一　七　五
とこ夏　一
夏草　二
夏衣　二
夏の　二
夏ひき　一
夏虫　三　一
夏むし　一
夏山　一　二
なに　何　二
なみ　浪　三　二六　三
浪(無み)　一
いは浪　一
浦浪　一
おきつ浪　一
佐々浪　一
白浪　八　二
しら浪　一
浪地　一
藤波　三
をれ浪　一
なみだ　涙　三三　一
涙河　六
にし　西　一
にしき　錦　七

	唐錦	一		
	庭	三		
には	野	六		
の	春日野	一		
	野風	一		
	野中	一		
	野はら	一		
	野邊	二		
	野へ	二		
のわきは	野分	一		
	葉	一		
	草葉	一		
	した葉	一		
	葉かへ	一		
	葉するゑ	一		
	はちす葉			一
は	羽	一		
はぎ	萩	四		
	あき萩	一		
はし	橋守	一		
はな	花	八	二	四
	卯花	一		
	櫻花	八	二	
	さくら花	二〇	三	
	すゑつむ花	一		

はっ花　一
はっ花そめ　一
花色衣　一
花かさ　一
花かたみ　一
花さくら　一
花すゝき　六
花そめ　一
花橘　二
花たちはな　一
梅花　一五
はま
濵「ハマ」　一
濵　一
濵千鳥　二
濵松　一
はら
原　一
あまの原　一
しの原　一
みかの原　一
わたの原　一（cf. わたのはら）
はる
春　四三　六四　一五
春霞　一
春かすみ　五　一七
春風　二　一　一
春さめ　一　二（cf. はるさめ）

春日(はるひ)　三　一　一
春へ　二
春めく
春雨　四
はるさめ
日　二(非仮名字形)　一(非仮名字形)
ひ
月日
春日(はるひ)　一(非仮名字形)
ひ
あし火　一
篝火　一
かゝり火　一
かやり火　一
はしり火　一
もしほ火　一
光　一
ひかり
ひさかた
久方の〈枕詞〉　九
ひと
人　六一　一二　二三〇　六三
あた人　一
あま人
うたかた人　一
うつし人　一
大宮人　一
さと人　一
そま人　一
たひ人　一
なに人　一　四

ねちけ人	一			
ひた人	一			
人こと(言)				
人たのめ				
人つて				
人〳〵				
人ま				
人め		一	七	一
人やり			一	
人忘草			一	
ふるさと人	一		一	
みな人	二	一	一	
宮こ人				
みやこ人	一		一	
山人			一	
世の人			一	
世人			一	
わひ人			三	一
をち方人				一
をちかた人	一			
獨			一	
姫松			一	
山姫			一	
藤衣			二	
藤波			三	
ひとり				
ひめ				
ふぢ				

ふね
舟　一　九　一
いな舟　一
おほ舟　一
たなゝしを舟　一
つり舟　一　一
ふゆ
冬　一　六　二
冬河　一
冬かれ　一
冬草　二
冬こもり　一
へ
葦邊　一
河邊　一
野邊　二
山邊　六
ほか
外　一　一　一
ほし
星　一
ほたる
螢　一
ほととぎす
郭公　一　二九　二
まくら
山郭公　七
枕　八　一
草枕　一
くさ枕　一
た枕　一
まつ
松　一　四　一一　六
松（待つ）　九

	こ松	一		一	
	濵松	一		一	
	姫松	一		一	
	ひめ松	一		一	
	松陰	一			
	松風	一	一		
	松しま〈地名〉	一	一		
	松虫	二	一		
まへ	目の前	三九	一	二（非仮名字形）	
み	身	一〇	二		
	うき身	一	一		
	わか身	一二	一		
みち	道	一三	一	八	
	なか道	三七	一		
みづ	水	三六	一	八	
	いはし水	二	一		
	さは水	一	二		
	し水	一	一		
	ぬま水	一	一		
	水くき	二	一		
	山した水	七	二		
みね	峯	一	二	三	
	岑	一	一		
みや	宮	二	二		
	大宮	一	一		

大宮人　一　一
宮木　二
宮木の〈地名〉　一
宮きの〈地名〉
宮こ（都）　八（cf. みやこ）
宮こしまへ　一
宮ことり　一
宮こ人　一
宮材　一
都　一（cf. みや）
昔　一三　三
虫　四
夏虫　三
松虫　一
午　二
馬
梅　七
梅かえ　一
梅花　一五　四
紫　三
こ紫　一
目の前　一
本　四
この本　二
本末　一

みやき
みやこ
むかし
むし
むま
むま
むめ
むらさき
め
もと

もみぢ
やしろ
やかぎ
やま

もの
山本　一
物　五　八六　二八
あた物　一
物うく　一
物思(ひ)　一
物思ひ　二
物思ふ　二
物かは　一　一
物わすれ　一
物わひし　二一　二一
物を　一〇
紅葉
社　一
柳　二
山　二二　八六　一三　一
あさか山
あふさか山　一　二
あへしま山
う地(宇治)山　一
うら山しく〈形容詞〉　一
奥山　三
おく山　一　四　一
をとは山　五
ゝ(を)とは山　一
鏡山　一

かさとり山　一
春日山　一
片岡山　一
かたをか山　一
かつらき山　一
かへる山　三
神なひ山　一
くらはし山　一
くらふ山　二
衣かせ山　一
さ月山　一
佐保山　二
さほ山　一
さら山　一
しけ山　一
しはつ山　一
しま山　一
白山　二
しら山　四
袖振山　一
そま山　一
たつた山　一
たむけ山　一
つくは山　一
ときは山　一

と山				一
とを山鳥				
とを山とり		一		
中山			二	
夏山			二	
の(野)山	一		一	
松山			二	
まつ山	一			
三山			一	
み山		一	三	
み山かくれ			三	
みわ山			一	
山あらし			一	
山おろし		二	一	
山風	二		二	
山かせ		一	三	
山かつ			二	
山かつら			一	
山河			三	
山川	一			
山かは	一			
山さくら	五		一	
山里			四	
山さと	二		三	
山した			一	
			一	一
			一	一

山した風			一	
山した水			二	
山しな〈地名〉			二	
山しろ〈地名〉			二	二
山田	二		五	
山橘			一	
山地			三	一
山ち	二			二
山てら				
山となてしこ	一			
山なか			一	
山なし			一	一
山のは	一		二	一
山のゐ			一	
山ひこ			四	
山人			一	
山姫			一	
山ふき			一	
山邊			六	
山へ	二	一	五	
山郭公			七	
山ほとゝきす			一	
山本			一	
山もと			一	
山わけ衣	二		一	

(cf. やまぶき)

山井(やまゐ)				一
よしの山				一
おとこ山		二		一
をの山				一
をはすて山	一			一
山吹	一	五		一
やまぶき				
ゆき				
雪		三四		一
あは雪		一		
白雪		一		
しら雪		一		
み雪		三		
雪け		一		
ゆふ				
夕霧				一
夕くれ		一		
夕され		一		
夕つく夜				
夕まくれ			一	
夕やみ			一	
ゆみ				
梓弓		四		
しらま弓		一		
ゆめ				
夢		二八	六	
夢地		四		
よ				
世	一	四〇	一七	
いく世		二		
うき世		一	一	

神世	二			
千世	四			一
み世	一			
世の人	一			
世人	一			
世ゝ	三			一
よろつ世	四			
夜	三〇	三		一二
さ夜	三			
さ夜なか	一			
月夜	二			
ひと夜	一	一		一
もゝ夜	一			
夕つく夜		一		
ゆふつく夜	二			
夜かれ	一			
夜こゑ			一	一
夜さむ				
夜ゐ	三			
よのなか				
世中	三〇(cf. なか)	一		一七(cf. なか)
わたつみ				
渡津海	一			
わたのはら				
渡之原	一(cf. はら)			
われ				
我	二	一		一三
我ら	七六			
ゐ	一			
井	三			

を	井せき	一	
をぎ	玉の緒	一	一
をみなへし	荻		
	女郎花	四	
〔動詞〕			
あけ	曙〈用〉	二	
あひ	逢〈体〉	一〇	
あらたまり	改る〈止〉	一	
あり	有〈用〉	二四	一
	有〈止〉	三	
	有あけ	一	
	有(り)こし	一	
	有そ(荒磯)海	一	
	有はて	一	
いり	入〈用〉	一	二
	入江	一	
うかび	浮〈体〉	一	一
うち	打〈体〉	一	
	打返し	一	
	打ぬる	一	
	打はへ	二	
	打はらひ	一	
	打渡す		一
	打わひ	一	

うらみ	怨〈未〉		一	
	怨〈用〉		二	一
おい	老〈用〉		一	
おもひ	思〈名詞〉		一	
	思ひ〈名詞〉		一八	三
	思は〈未〉		四	四
	思〈用〉	一	一二	六
	思ひ〈用〉		七	八
	思〈止〉		四	一
	思ふ〈止〉		三	一
	思〈体〉	一	四一	一三
	思ふ〈体〉		一七	一一
	思へ〈已〉		一四	四
	思あへ		一	
	思いて〈名詞〉		一	
	思いて(出)	一	一	
	思いつ(出)		一	
	思いつる(出)		三	
	思ひをき(置)		一	
	思ひかけ		一	
	思きゆ(消)		一	
	思ひきゆ		一	
	思こし(来)		一	
	思ひこし		一	
	思ひくらし		一	

思しら(知)　一
思ひしら　一
思しり　二
思そめ　三
思ひそめ　一
思ひたち　一
思ひたはれ　一
思ひつらね　一
思ひなさ　一
思ひなし　一
思ひね(寝)　一
思はなれ　一
思みたれ　二
思ひみたれ　一
思みたるゝ　二
思やる　一
思ひやれ　一
思渡ら(む)　一
思ひをれ　一
物思(ひ)　二
物思ひ　一
もの思ひ　一
物思〈体〉　一
物思ふ〈体〉　二
限(り)　九

かぎり　一

かへし	返し〈用〉	一		
	返ゝ(す)	二		
	打返し〈用〉			一
	吹返し〈用〉	一		
かへり	立返り〈用〉	一		
かへり	歸〈用〉	一		
	歸〈体〉			
	歸こ〈来〉		一	
	立歸〈用〉	一		
	立歸り〈用〉	二		
	立歸〈体〉	一		一
くれ	暮〈用〉			
こひ	戀〈名詞〉	三		
	戀〈用〉	二		
	戀する			一
	戀わひ	一		一
さだめ	定かね	一		
しのび	忍〈体〉	二		
	忍れ〈已〉	一		
すぎ	過行			一
そめ	染〈用〉			一
たち	立〈用〉	二		
	立〈止〉	三	一	
	立〈体〉	五		
	立「タツ」〈体〉		一	

立返り　一
立歸(り)　一
立歸り　二
立歸(る)　一
立くもり　一
立とまり　一
立より　一
立別(れ)　二
立わかれ　一
立わたり　一
尋〈用〉　一
尋くれ(来)　一
たづね　一
馮そめ　一
たのみ
問〈体〉　二
とひ
流(れ)　二
ながれ
流〈用〉　九
流〈止〉　三
流る〈止〉　一
流る〈体〉　一
流いつる　一
鳴はしむ　一
なき
嘆(き)　二
なげき
成〈用〉　三
なり
始〈名詞〉　一
はじめ
引〈体〉　一
ひき

一

二

	あし引の〈枕詞〉	一（cf. あしひき）		
ふき	吹〈用〉	一	四	
	吹〈止〉		一	
	吹〈体〉		一六	二
	吹あけ		一	
	吹返し		一	
	吹（き）くる		一	
	吹とち		一	
	吹まよふ		一	
まうし	申す〈止〉		一	一
	申せ〈令〉		一	
まき	巻そめ		一	一
まどひ	迷〈用〉		四	一
	迷〈体〉		三	
み	見〈用〉	一（非仮名字形）		
もり	関守		一	
	橋守		一	
ゆき	行〈用〉		五	
	行〈体〉	一	一五	一
	かれ行〈体〉		一	
	した行〈体〉		一	
	過行〈体〉		一	一
	すき行〈体〉		一	
	行方			一
	行かふ		一	

行かよふ	一		一	
行めくり	一		一	
わかれ	別(れ)	一	七	
	別〈用〉		二	
	立別〈用〉		一	
わすれ	忘〈用〉		三	
	忘(る)る〈体〉		一	一
	人忘草		一	
	忘草「ワスレクサ」	一	四	
	忘草			
わたし	渡せ〈已〉	一		
	打渡す〈体〉			一
わたり	渡〈未〉		一	
	渡〈止〉		一	
	渡〈体〉		一	
	思渡ら〈未〉		一	
	こひ渡〈用〉		一	
	こひ渡〈体〉		二	
	なき渡〈用〉		一	
	なき渡〈止〉		一	
をり	折〈用〉		四	
〔形容詞・形容動詞〕				
あさし	浅き〈体〉		一	
おほき	大河	一		

一

	大きみ	一	
	大宮		
	大宮人		
かなし	悲かる〈体〉	一	一
	悲き〈体〉	二	一
くるし	苦き〈体〉		
こひし	戀しき〈体〉	三（cf. こひ）	一（cf. こひ）
	戀しさ		
しら	白菊	二	
	白雲	一〇	二
	白玉	五	
	白露	七	一
	白浪	八	二
	白山	二	
	白雪	一一	
たかし	高み	一	
ながし	長く〈用〉	一	
	長き〈体〉	一	
ふかし	深く〈用〉	二	
	深し〈止〉		一
	深き〈体〉	二	一
	深草	一	二
わかし	若草		一
わびし	憀慄き〈体〉	一	

〔副詞・連体詞・接続詞〕

いかに	如何		一
さらに	更に		五
なほ	猶		一〇
また	又	二	二
	又も		四
わが	我	一	

〔助詞・助動詞・連語〕

かな	哉	五	五
がな	てし哉		二
	も哉	一	九
けむ	欤		五
つる	鶯		一
てふ	蝶（といふ）		一
ども	靴		一
なむ	南（未然形接続）		一〇
	南（連用形接続）		五
	南（係助詞）		一
なり	也		六
	へら也		一二
ばかり	許	三	一九
	いか許		一
らむ	覧		五三
	いかな覧		一

のこ覧（残らむ）

「漢字字種対照表」〈表2〉

『風躰』『秀歌』『古今』『奥入』『更級』『土左』

［名詞］

あかつき		暁	暁			
あき	秋	秋	秋	秋	秋	秋
あさ			朝			
あし			葦			
あした				朝	朝	
あしひき				葦引		
あづさ				梓		
あまのがは	天河				天河	
あめ		雨			雨	雨
あらし	嵐		嵐			
いけ			池	池	池	池
いと			絲			
いのち			命			
いへ				家	家	家
いま		今	今	今	今	今
いろ		色	色	色	色	
う	卯		卯			
うぐひす	鶯		鶯			
うち			内			内
うつせみ						
うは			海	浦	浦	浦
うみ			海	浦	浦	浦
うら			浦	浦	浦	浦
え			江	江	江	江
えだ			枝	枝	枝	枝
おく			奥			
かがみ			鏡		鏡	
かがり			篝	篝		
かき			垣	垣		
かげ			影	影	影	影
かげ	陰					
かさ			笠			
かすみ	霞		霞			
かぜ	風		風	風	風	風
かた			方	方	方	方
かつら			桂			
かど				門	門	
かは	河		河	河	河	河
かは	川		河	河	河	河
かみ	神	神	神	神	神	神
かみなづき	神無月					

空蟬

上

かめ　亀
から　唐
かり　鴈
き　木
きし　岸
きた　北
きのふ　昨日
きみ　君
きり　霧
きりぎりす　蟋蟀
きりぎりす　蛬
くさ　草
くしげ　匣
くも　雲
くれなゐ　紅
けふ　今日
けぶり　煙
こ　子
ここち　心地
こころ　心
こと　事
こほり　氷
こま　駒
ころも　衣
こゑ　聲

かめ　亀
から　唐
かり　鴈
き　木
きし　岸
きた　北
きのふ　昨日
きみ　君
きり　霧
きりぎりす　蟋蟀
きりぎりす　蛬
くさ　草
くしげ　匣
くも　雲
くれなゐ　紅
けふ　今日
けぶり　煙
こ　子
ここち　心地
こころ　心
こと　事
こほり　氷
こま　駒
ころも　衣
こゑ　聲

さか　坂
さくら　櫻
さつき　五月
さと　里
さほ　棹
さみだれ　五月雨
しか　鹿
しきたへ　敷妙
しぐれ　時雨
した　下
しま　嶋
しも　霜
しろたへ　白妙
すが　菅
すゑ　末
せ　瀬
せき　関
せみ　蟬
そで　袖
たまくら　手枕
た　田
たき　滝
たけ　竹
たちばな　橘
たなばた　織女

さか　坂
さくら　櫻
さつき　五月
さと　里
さほ　棹
さみだれ　五月雨
しか　鹿
しきたへ　敷妙
しぐれ　時雨
した　下
しま　嶋
しも　霜
しろたへ　白妙
すが　菅
すゑ　末
せ　瀬
せき　関
せみ　蟬
そで　袖
たまくら　手枕
た　田
たき　滝
たけ　竹
たちばな　橘
たなばた　織女

たに	谷	谷	にし	西
たび	旅		にしき	錦
たま	玉		には	庭
たれ	誰	誰	の	野
ち	千	千	のわき	
ちり	塵	千	は	野分
つき	月	月	は	葉
つみ	罪		はぎ	萩
つゆ	露	露	はし	橋
つる	鶴	露	はな	花
て	手	手	はま	濵
とき	時	時	はら	原
ところ	所	所	はる	春
とし	年	年	はるさめ	春雨
となり	隣		ひ	日
とも	友		ひ	火
とり	鳥	鳥	ひかり	光
な	名		ひさかた	久方
なか	中	中	ひと	人
ながつき	長月		ひとり	独
なつ	夏	夏	ひめ	姫
なに	何	夏	ふぢ	藤
なみ	浪	浪	ふね	舟
なみ	波	浪	ふゆ	冬
なみだ	涙	涙	へ	邊

ほか　外　外
ほし　星　外
ほたる　螢　郭公
ほととぎす　郭公　郭公
まくら　枕　郭公
まつ　松　松
まへ　前　松
み　身　身
みち　道　身
みづ　水　水
みね　峯　峯
みや　宮　岑
みやき　宮材　宮
みやこ　都　宮
むかし　昔　宮
むし　虫　宮
むま　午　宮
むま　馬　宮
むめ　梅　梅
むらさき　紫　梅
め　目　梅
もと　本　梅
もの　物　梅
もみぢ　紅葉　紅葉

やしろ　社　柳
やなぎ　柳　柳
やま　山　山
やまぶき　山吹　山吹
ゆき　雪　雪
ゆふ　夕　夕
ゆみ　弓　夕
ゆめ　夢　夢
よ　世　世
よ　夜　夜
よのなか　世中　世中
わたつみ　渡津海　渡津海
わたのはら　渡之原　世中
われ　我　我
ゐ　井　井
を　緒　我
をぎ　荻　我
をみなへし　女郎花　我

［動詞］
あけ　曙　世中
あひ　逢　世中
あらたまり　改　世中
あり　有　有
いり　入　入

うかび　浮
うち　打　打
うらみ　怨　怨
おい　老
おもひ　思　思　思
かぎり　限
かへし　返　返
かへり　返　返　返
かへり　返
くれ　暮
こひ　戀　戀
さだめ　定
しのび　忍
すぎ　過
そめ　染
たち　立　立　立
たづね　尋　立
たのみ　憑
とひ　問
ながれ　流　流
なき　鳴
なげき　嘆
なり　成
はじめ　始
ひき　引

ふき　吹
まうし　打　申
まき　巻
まどひ　迷
み　見
もり　守
ゆき　行　行
わかれ　別　別
わすれ　忘　忘
わたし　渡　渡
わたり　渡
をり　折

［形容詞・形容動詞］

あさし　浅
おほき　大　大
かなし　悲　悲
くるし　苦
こひし　戀　戀
しら　白　白
たかし　高
ながし　長
ふかし　深　深
わかし　若
わびし　慘慄

［副詞・連体詞・接続詞］

いかに　如何
さらに　更
なほ　猶　猶　猶
また　又　又　又　又　又
わが　我

［助詞・助動詞・連語］

かな　哉　哉　哉
がな　哉　哉　哉
けむ　劒
つる　鶴
てふ　蝶
ども　鞆
なむ　南
なり　也　也　也
ばかり　許　許　許
らむ　覧　覧　覧

以上、二五二語